

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

全五冊曲草主人編

大人

南總里見八犬傳第九輯

下卷之下

共拾十之卷或拾五子

丁子屋平兵衛

皇英泉



南總里見八大傳第九輯卷之二十七

東都

曲亭主人編次

第一百四十二回

兩派を譲て辰巳譲蘿を贈と  
故事を尋て政元名畫を觀る

却説冀於兔子の當晚經て又た宿をとる柳の枕頭の蓮花す優ぶ  
海島の島の朝うち里の寺を我一句彼一句相譚ひ曉を喰く快く正哉雲の隔離の  
山うねりを載せ楚室の雨り悲憤の意を打下す人知れぬ蝶花す  
辱處と食化す不記す惜於水と尾乞闇し  
は温故嘗新の意陳懶惰情走す禁を。又暖天と積病發して初す腹不就  
夫。又天の明るい和日が高いと三竿許外で晝食候時候支拂驚  
寛復一起坐す。冀も遼々と用火で打て茶を煮る程す於兔子の湯を以て

身の内自身は寧んじ思ひをもへあるのと。坐す。やうで受取ふ。と。と並んで機六  
木點頭す。其た良も既に精。と。那頑童のるからむ昨宵。裏祭不三。其  
木。身ひそめの事。このへば。天香。勝安れ。意。是。這棄田の山院。尋美鹿に。甲も目。乙の見。云。禪  
木高。あべど。今。ま。す。と。ど。る。手。是。老る。狹。狂。の。主。と。  
疑ひ。唄。山。木。木。伐。行。動。丸。山。鬼。爲。嚇。と。向。氣。あり。豈。時。在。備。  
火。錘。を。其。方。推向。空。丸。放。襷。へ。其。紙。怪。立。地。退。去。と。し。と。  
あり。故。狡。鴉。ま。よ。あ。ぬ。ど。年。ま。這。鳥。督。銃。一。挺。貯。持。明。日。う。て。山。拵。と。風。  
果。し。か。ま。て。那。獣。物。の。ま。ゆ。と。ち。く。ゆ。想。鷲。と。其。本。體。を見。と。張。ま。や。  
見。く。つ。身。の。胸。守。も。唄。ま。往。と。お。と。指。さ。と。説。誇。と。が。禁。禁。權。禁。禁。  
身。い。き。身。の。胸。守。も。唄。ま。往。と。お。と。指。さ。と。説。誇。と。が。禁。禁。權。禁。禁。  
身。い。き。身。の。胸。守。も。唄。ま。往。と。お。と。指。さ。と。説。誇。と。が。禁。禁。權。禁。禁。  
思。ふ。後。悔。と。も。ま。と。及。て。所。經。所。經。所。經。所。經。所。經。所。經。

遠處を離れて、御子の頑童が主の宿所へ支加を求め八朔ふらを又言ひてぞ日景便く  
下宿時候えんと出でまつりて、天狗の陰にあれば日を懼く。夜を宗  
とも。是其眞の人うへ明證と做もよびれる者多き况や我達暗ゆ相一相  
重ねて他へ變化能真の初童歟。ひやく譲つべて、まよめか心すゑへ  
解して於免子へ移し信てみずかを身に任へん。明日行て山梅を採果一束を埋  
伏し、ひそぎを願ひせき取分先は見出るがままに疾丸身を叛ん。時分を遣ゆ  
キ。誤り合ひも生じぬ。がま子の宿所へ還りて、然ば候を追計較へ告げ  
まどか。一言事も御り知れぬ。うれども於免子様六どよ西魔王は佛心に打  
破れし年ま修可。善教を千暗の瀬へ放下さ。神の祐を戒え対談致す。  
畢竟も是れまじ鳥俗す。云於免子日毎不善を隨意酒を喫し歸て討り走ひ亦支那枕  
饅頭を海酒の味のみ耽り。おと實實の身に宣寄れ。も借財の増を増す。星雲寺

身丁合。作りあく日と定め人を筆と借て還さば是よりの後義父九重平の日を藉進  
ひきし。家を廟か。家次の要を取る。藏み架棚の足を補へ。又の草指も業師請ひ。相  
手とえども矧又。那神童の誠よ。虎の面額。弓矢用も。星と自ら。自らの画題に  
故。賣垂画まで敢意。と。筆が無事。不似不善の根ね。也。も。筆が御子内と化す。  
本性は色の痴氣。然見え。甘利。色を防ぐ。思ふ。日足うち。後。村長。召す。の病  
いふ。宿ね。辯ゆ。日毎。宿所。一在。疎遠十四日。よ。及。程。有。一日。又。村長。光輝。  
小衛。も。つ。頃。日。の。う。と。て。ま。ま。の。れ。も。早。早。過。月。晴。此。コ。タ。日。を。  
錦。合。天。主。も。あり。央。錢。望。あ。が。开。ま。左。も。右。の。す。す。を。先。明日。風。う。そ。ま。ひ。  
ツ。ま。人。を。族。き。う。涯。ゆ。む。と。恐。ど。口。状。後。え。す。あ。ぬ。が。於。免。今。又。固。聲。由  
。れ。や。他。や。央。族。の。前。宿。も。あ。萬。を。早。そ。醉。住。を。三。宿。を。春。宿。宿。う。債。の。題。こ  
寛。解。る。便。宜。わ。せ。す。と。尋。思。こ。あ。が。そ。う。と。安。く。身。使。と。返。う。身。を。宿。



當之果人住烏詩山腰有神平名酒取  
 是花里抱石與其同歸見其禍食石禁鉗路登之福  
 仰天嘆之謂人誠妄之世之情未得此自之年來  
 腿發者奢俗之答之懷依多有神遇勤使天極之故  
 若外是土中廢骨間王廳下靈鬼不以今何如已鬼之  
 船漁之旋而至從之行程多與向答由是且與之賛令汗流  
 未竟而退點然余程之餘量之空之宿所立六百步之室  
 鋸砲之大甚之鑽之擡之放之據之一様之行臺之背之  
 勢之呼之累之身之仰反之付之當下撫之鋸砲引提之  
 之走寄之程之少之未至之未至之未至之未至之未至  
 之未至之未至之未至之未至之未至之未至之未至之未至

軍營更走其里之田相之數作之那行臺之今村長許  
 兔子之骨打碎之自無口之吐之鮮血襟之帶之韓紅之保做之舟  
 所之鋸傷之不吾葉之唇之魂既之天之歸之六魄輒地之墮之又陽之  
 之不保之驚之撫之鋸之投之廢之廢居之撞之膝之坐之胸之敲之聲戰  
 之却慄之殺之也。之。之。之。之。之。之。之。之。  
 過之及之差池失之東面目之。之。之。之。之。之。  
 事情之知之。之。之。之。之。之。之。之。  
 之。之。之。之。之。之。之。之。  
 之。之。之。之。之。之。之。之。



とおもひて、まことに、  
とおもひて敵へて、そつて、  
腰を縮め、腰を起すと、  
直人とおもひて、程々、  
直人へて、えも、と  
直人も思ふ。勝の寄り禁む。あらゆる、  
鐵砲會。まことに、振内、と蕉六が頭  
蓋へて、破と擊す。夫の汗が不祥の時、運桂六を百會す。眉上三す打砲れ。六見  
ゆゑを。  
れ脣碎ける。必死の深夜、  
妻時をぬ堪へる。云とぞう。手反て、  
筋骨弛つた。妻の亮家と立地、  
けり然へ。翼を妻の亮家と立地、  
黒あーと車送る。以れをも又とぞう。  
後物か。想はて、豫よ。那孩童を、  
猩猩の妖怪よ。と思ひぬ。見識、あれ。が孩童の  
事。あらゆる、  
夫の魂を追跡砲をも。方儀堅撃。捉ま。碎く。丈夫は、妖怪訓和の術丸。ば自身のそと免れ  
る。と父とも想ふ。我宅眷と熟す。解屍の罪人へ結柵と領主へ訴言。まことに、直人  
剣うち。名を復す。易く。我一朝の怒。無して。植一穴。躬所の深瘡を。他死して。  
せざる。照人みけれ。我身死す。まことに。於免子様六が非命の元。我所為。うそと。何をも  
の。馬鹿。

いひ解んや道を持々と乍ら聞かれ。牢獄は毎日繩引責ふ苦しき罪ある。四  
五折悔の八千度。百千度。悔て喧と嘆と辱め。並びにをすがすも左の手も右の手も  
うけ。身の如くハ禍鬼の立む處で人蹟を絶え。巴を今も危窮する事。妻へ  
表へ。あらゆる日月の時を。あま。他御。郊外。厄解。今。夏を。後意。青詔。ユ  
做とまじ。幸を。と。脛を。向ひ。肚を。答へ。遠く先。四下。と見。西。秋の日早く西沈て。  
黙々時候。よろず。か田舎。素。人稀。と。徂來。絶れ。知。者。か。と。折。丁。を。よみ。と。備歩  
まく。已。宿所。を。ひ。入。猛可。よ。計較。し。奸智。の。歸。匍。い。ま。重。及。素。放。入。類。印。引。よ。筆。と  
深。る。画。研。の。池。ひ。深。れ。と。深。れ。伎。術。更。そ。又。表。層。の。業。を。造。言。思。ひ。筋。、寫。着。筆。と。移。身。と  
起。筋。ひ。逆。旅。の。准。備。、那。セ。墨。す。虎。の。兩。軸。を。被。よ。裏。す。背。、駕。つ。く。立。失。く。人。愚。ふ  
う。我。自。ハ。取。く。第。一。體。化。無。一。貴。の。金。財。へ。ゆ。と。衣。物。皆。四。才。被。ら。て。久。く。鮮。鋪。の。庫。よ  
もう。身。の。行。往。と。う。と。そ。め。明。日。よ。う。と。何。そ。り。上。空。旅。宿。の。盤。纏。を。せん。や。ね。ど



羅本

涉

卷之三

量

幻術見る我眼とや。驚嘆せん余よ。ふる勢氣す。那の睡る虎の弓軸も。本多  
岡吉。あくび。其弓價直。其弓。事怪。過れ。今や。許。及。信素紙。又  
あも。よと。疑へ。起り。安。ねが。獨。件。弓軸。を。食。射。地。用。眼。を。其。首。薄。  
壁。推。官。又。食。其。十。賣。見。故。色。名。書。里。ア。始。も。か。度。る。是  
。そ。我。生。を。安。無。過。本。外。改。書。百。頭。と。食。貢。白。家。清。百。金。千。金。  
價。も。か。よ。か。る。と。思。て。の。そ。近。旅。主。人。相。譚。ひ。遊。弓。軸。と。活。え。ま。よ。  
前。そ。難。波。都。と。見。せ。う。今。弓。箭。備。一。鰐。村。弓。見。れ。馬。を。知。し。者。あ。と。之。誰。う。政。正。定  
ま。玉。と。石。と。舞。や。へ。た。其。重。虎。瞳。子。る。を。肥。筆。を。と。思。の。縦。直。弓。厚。  
若。老。者。今。と。テ。ス。う。か。翼。風。望。て。失。ひ。や。然。と。虎。の。眼。烏。珠。と。加。え。買。ふ。家。え。セ。る。  
ま。ゆ。ひ。く。又。思。復。我。弟。行。童。の。條。而。守。ク。手。を。加。え。這。友。備。校。出。そ。人。を  
傳。い。れ。も。と。さ。が。そ。未。後。悔。か。れ。モ。要。易。免。技。難。い。よ。と。左。エ。カ。思。業。

圖 瞳

之類の利分堵錢思ひ隨る。唐又買て併ん。達義甚廢と號誇れ。壁紙敷  
意外也。敢亦異議。又喜前早天ニ起。早便と果一房錢と元小ニ。還トモ  
身手。那秀軸と携。余市と共に京より赴。姑且他宿所より墨裏。那行童よ  
解示され。牛の金剛の画の來歴を詳く寫相添。次の日余市より遼興之。金帝  
受食す。躊躇く被りを穿。一刀で腰より帶を抜き。途中香西復山の宿所不當て人情と  
感。對面詣。件の名画を官領家の内覽。又金帝と願。其復山則あ画と  
是く竹林翼風。只今那里に在。やと向。余市答て那人。其秀軸と活人とも。  
今。遠方よりまわる。留。不可。宿所。すれり御尋の如き。石俱も易い。といふ。今  
曰。よ。唐沙汰あるま。秀軸ハ且上楷ねど。見れて余市ハ首尾。と。第と思。遠方を観。御  
贈て歸。一宿所へ。是。不頗。京。宮。鎮。慶。元主。皇。慶。は。大江親。六。書。ア。信。家。留。て。詞。敵。ア  
機。そ。大。連。甲。堅。前。仰。之。敵。と。古。ぞ。德。備。用。力。赤。該。擊。の。家。寛。よ。取。と。箱。久。ノ。布。カ。ヒ

喧々頭を生ひて。かくして。會社の一擧の時。歴得と会て。空の過を。雪吹脛。初冬の風。冒氣も。ひまつて持病の虫積又起り。銚金茶餌の致めを。もの故。先のす良方。又商量して。徳用堅前西師徒。加持と相応しかば。只願ふ請宣示。政元亦已と。を。即徳用堅前と。よせ。讀經の角度で。先教れ。そ。御法の力を。益して。姫の病懲。安。功と。奏と。と。命。是る。尾。よう。徳用堅前。に。出頭の。拵。處の。臥房。より。政元。徳用。法増。降。折。麻室。よ。召。よ。那。病。着。の。輕重。を。法驗の。速。と。同。徳用。詭。詐。の。序。次。と。然。姫。上の。脚。病。化。由。病。の。よ。ひ。定。想。思。病。あく。ま。也。法。驅。甲。斐。文。自。い。し。と。よ。を。政。元。説。り。て。开。口。報。之。と。は。不。解。と。同。徳用。詭。詐。の。序。次。と。然。姫。上の。脚。病。化。由。病。言。禪。の。よ。似。れ。と。お。館。他。を。陪。坐。よ。做。さ。と。よ。う。御。煩。徳。用。か。り。徳。用。か。り。



耕

猶見之。予在洛方記。水衡。是も亦金剛。更に虎の體と唱。是も三と  
同くして詠。一ノ入觀長康。かゝる人物と馬。トカ都て其詠。黙也と人詠。是を  
ヒテ。昂登西昇研。唯本物處。信神寫。既阿堵中。す。是を。名画。星食  
トシ。猪絆。と。用。首。ト。ま。と。美。車。と。足。絶。あ。他の名画。唐の窟。本立。及。江都  
王。魏。鄭慶。王維。王墨。等。數人の事。皆傳。神。至。妙。故。舉。は。皇。連。ゆ。と。就中  
ト。か。う。き。が。生。を。見。る。ち。こ。そ。大奇。元人。南仰。が。輕耕。錄。卷。第。二。溫州。監郡。き。木。の。一。せ。の。画。像。新。監。郡  
ある。某。の。す。と。支。帰。る。そ。し。及。杜荀鶴。鶴。松。空。題。雜。記。は。載。る。唐。進。士。顧。勝。  
画。美。人。真。々。と。精。合。一。子。と。生。り。よ。復。よ。由。サ。軌。障。は。歸。上。く。其。画。中。一。て。せ  
跡。さ。う。と。ア。文。表。れ。ば。具。と。原。文。と。照。一。考。須。め。も。け。て。是。坐。る。理。の。多。所。考。  
正。事。の。れ。が。と。詳。ふ。筆。か。載。れ。蘇。東。畫。く。書。日。を。信。せ。が。書。う。不。物。と。重。  
則。は。彼。一。世。の。人。物。は。因。て。情。寢。り。と。強。り。感。を。見。と。ゆ。そ。を。も。三。伏。の。日。

名画の雪山を觀。清涼。す。暑熱。衰。冬の霜。霜。名画の荒鳥を觀。小。春の心。心  
生。モ。近日。ある。人の狂。歌。よ。蓬。モ。草。見。守。セ。歟。人の恋。尼。海。世。画。卷。ト。か。ぞ。有。り。と。  
詠。さ。や。み。の。操。さ。一。壁。さ。ハ。長。道。云。道。子。ハ。画。ハ。一。地。獄。変。相。ハ。後。ユ。成。都。人。諸  
ま。て。観。て。感。罪。と。懼。モ。腐。田。と。備。レ。猶。且。兩。や。の。屠。活。其。肉。元。が。為。不。雑。モ。ぞ。  
リ。一。名。の。ざ。と。だ。か。又。ち。え。ま。の。ざ。ま。る。よ。そ。  
李思訓。が。大。同。殿。の。壁。す。画。な。け。山水。ハ。玄。帝。す。宿。夜。ゆ。と。水。聲。と。笑。と。と。一。名。  
「蘿。妙。高。鶴。言。魯。」か。一。有。傳。代。い。名。馬。す。奇。特。を。と。少。無。と。ぞ。べ。ど。も。又。必。有。と  
え。く。も。と。あ。の。故。ニ。孔。聖。ハ。怪。力。亂。神。と。語。ら。ず。と。す。ま。へ。と。も。思。考。を。向。ま。の。と。互。  
ま。と。通。愛。す。と。博。掌。タ。肩。我。憶。む。一。義。す。よ。く。よ。ん。是。す。同。を。致。と。か。御。と。あ。る  
え。お。見。ぬ。せ。り。る。唐。山。の。故。美。ハ。左。ま。れ。明。日。我。故。書。の。直。徳。と。試。て。那。  
移。經。と。改。變。と。升。モ。升。す。後。半。を。知。ぶ。れ。大。謹。す。と。安。た。あ。日。の。暗。譚。ハ。果。不。

7

虎眼子點火藥公文廳之開示  
第一回

卷之三

既りと當田慶の有司を督せし事程よ。國警言聞の走卒聲高す。四條某の町  
ある經紀余布許歇宿るを。近旅の風景竹林巽風也。疾參らんと喰れ。巽風余  
もよつまつと。左近の御風先と告て。速く身を起せ。件の走卒遣す。左  
鳥外幸まふ。當下巽風先と抜き。かねて。ひの戸え。廳の光景を見。豆子。有三  
左右より羅列して管領へと。坐の上を又有司の後方す。帷幕布の裏面より身甲を打  
て。右のと。士三四十名より。筋槍。鉤索。と執る。あがへ頭人と。番たて。個の武士。一對の武具を。整  
頓と。わざ。入鳥の左右より。聲聞。固の走卒二三十名。各。捍棒。と。衝立て。四下。眼を配て  
居。思ひ。増よる。武備。儀。威風。面を向。もの。あれ。余市から。巽風。と。見  
あがる。安危。を。思ひ。脇を。躊躇居。姑且。政。香西復六と  
先。一個の。智。大刀。熟。算風。背。大刀。算風。背。大刀。算風。背。大刀。算風。背。

之のうち毛骨悚然する如き事無く其のあんまりの如きに  
付一箇近習へ熱金固の虎の車輦を皆す載て主君の側に持せり。翌日  
有司聲を被す誰も居る人共風を疾き者を啜り一個の玉膳侍を遣すと早速風を喫  
孫も孫類も逐一至り翼風の打拂の申の時可る銅色の巻半日衣す鳥矢袋  
十徳の肩長で陳を赤糞色を做すとうち投げ引入て政西面前を表す時宵猶可  
貰衣店を買取へ公服の下衣されば膚寒に御身と云ふ者と昨宵猶可  
家の馬風姿を思ひ青音侍の笑ひを忍びては儘捨居を退き程み一個の有司膳を找て信と  
翼風を向ひ竹林と共に其妻を往日沙翁内覽を屬ひより故画の愛を詠説する事す  
直大の事生じて家碑を書寫して憲覽を備まつしやむ相連ある事無事と妻の  
そと改められず。主君翼風舊の仰美を以て那虎圖の傳本書より備の眼を黙る  
事。地主後先を人を傷あ危険あるとひた其画で神りて價を貴く見爲す。而して唐

之のうち毛骨悚然する如き事無く其のあんまりの如きに  
付一箇近習へ熱金固の虎の車輦を皆す載て主君の側に持せり。翌日  
有司聲を被す誰も居る人共風を疾き者を啜り一個の玉膳侍を遣すと早速風を喫  
孫も孫類も逐一至り翼風の打拂の申の時可る銅色の巻半日衣す鳥矢袋  
十徳の肩長で陳を赤糞色を做すとうち投げ引入て政西面前を表す時宵猶可  
貰衣店を買取へ公服の下衣されば膚寒に御身と云ふ者と昨宵猶可  
家の馬風姿を思ひ青音侍の笑ひを忍びては儘捨居を退き程み一個の有司膳を找て信と  
翼風を向ひ竹林と共に其妻を往日沙翁内覽を屬ひより故画の愛を詠説する事す  
直大の事生じて家碑を書寫して憲覽を備まつしやむ相連ある事無事と妻の  
そと改められず。主君翼風舊の仰美を以て那虎圖の傳本書より備の眼を黙る  
事。地主後先を人を傷あ危険あるとひた其画で神りて價を貴く見爲す。而して唐

の虎の眼も黒とすむ。奇特見ゆき。その開けたま失礼ばはの罪をあつて。僧又笑ふ。  
「汝やうが开り未曾有の珍重。サシマ御懲り難ひ。おちまよん。空。  
居て。あくと。零と。なまく。」  
居て。あくと。零と。なまく。慢侮をまか。黒鷹を下。金織をまへ。夜點を。推舞。空。  
を。後悔を。も及ん。と。諭。驚き。已。充。翼。風。至。休。是。唐衣。在。高。思。今。那。神童。の。慶。  
夢。あくと。零と。なまく。驚き。所。爲。え。と。化。累。と。神。佛。の。化。現。と。而。猶。裡。の。變。う。が。那。故。ね。又。是。實。と。做。と。  
尽。と。あ。の。古。示。を。怕。し。ん。よ。今。の。安。危。の。觀。面。こ。だ。黒。を。吉。よ。と。尋。思。と。そ。頭。  
指。げ。御。教。諭。威。怖。特。家。訓。及。師。面。の。聲。戒。瓦。あ。若。一。旦。ハ。箇。説。と。解。じ。事。と。を。  
今。ハ。も。既。と。上。手。手。の。眼。の。黒。ま。師。付。り。素。ひ。て。せ。と。左。右。往。け。足。手。時。の。有。  
て。家。行。と。頼。ほ。と。そ。試。ひ。る。身。と。御。用。捨。と。て。腰。束。と。答。て。足。と。引。よ。と。懷。  
紙。と。あ。て。墨。氣。と。那。行。産。と。弊。れ。る。眼。と。黒。と。あ。風。透。と。甲。七。と。鳥。試。と。十二。生。育。と。  
同。と。で。足。の。こ。底。と。走。れ。と。足。と。脚。と。則。件。の。画。虎。の。雙。眼。と。白。珠。と。奪。と。

「おれは姫倅鈴家、幸運の與せんと察され、あら幻術の虎をうがれ、穢物も祓ひて、既生の戦  
今朝、猿石吳林鉄索をよ及んで、皆みゆび延年者へ喧嘩され避ひよき、或は跌六段、ひづきを折り脚を折り腰を  
折り、さうのまがひく。」  
「合を取る、出没迅速、退猛惡中、さうかくも復六段、有司の近習主日侍、大儀ある。  
主君を守護し、母を養へ、齊々、屏風の陰に在り、又、局の左右に排列する。」  
「駕轡とく持よ。棒も手の甲斐へり、送る人を盾に、咸一圓玉替へる。」  
「駕轡とく、骨生記録、御余布で車の裏面千體で、一輪車時も内堪能外百へ、送ふと  
御車を出足を失ひ、跌倒れて、一聲苦と叶ひも果をえ、儘氣絶をす。」  
「ひそひそと、走りぬる。」  
「走じて、旅宿の人を傷めん、宿と走馬時、  
志跡、  
志跡、  
えん、  
えん、  
えん、  
えん、





詛









傷

出詳を以て巽風を家に留て利と殊むる故、萬葉を病者多病者愈て起半日小赤身の石  
捕う坐首を被ひ家庫財金の復古を以て室春の追放せしれ然化は人の覆け  
録附にて二百金あれば余分が猶す莫ひ是を夜なて女と子遊む事す是を  
奉る事無く  
小社の神主よ候り一子孫才よ相濟あす。かと是後の話へ現に内山の御返す善  
くおもひてそぞもとおもひてそぞもとおもひてそぞもとおもひてそぞもとおもひて  
六般の理りにて這經紀の事を治那虎の暴暴出一折五人命にてては其疾を蒙り有司力士  
あり。是事の後は其後又白川上革那虎復反行軍工良鶴たる督是事を金賞不奉不處不處  
人をもひ。かとおもひてそぞもとおもひてそぞもとおもひてそぞもとおもひてそぞもとおもひて  
奸人一體より且善人もが山を度せよがばり虎の檻見せ有佳れは是事蒙れ。是事  
父母も子もさう仁政をくわひ従ひぞモ那虎の少主モ。ベトニス議院の批評する所。  
まことに其言と迂遠とて取用ひとえく其の非で歸心人を屠ると來の像く紀元市を詠歌  
たる後は詠歌甚麼だや开きを悉と改め。是うち又下の因よ解分るを聽ねや。

南總里見八犬傳第九編卷二十七 終

天保九年戊戌年

五月十九日寫了

菩薩堂年集

墨

福硯齋

大吉利市